受け継がれる「文教」の思い

釈菜

多久聖廟創建以来300年以上継承され、県重要無形民俗文化財に指定されている伝統行事。孔子の遺徳を讃える中国式の祭典です。また、聖廟前で披露する地元の学生たちの「釈菜の舞」、保存会による曲芸的で迫力ある「獅子舞」、西渓校小学部による「腰鼓」は必見です。

～せきさい～

釈菜

六、多くの市民や教育者の力によって伝えられる文教の誇り

多久聖廟で行われる釈菜は、春と秋の年2回開かれる多久聖廟の祭典です。市職員等が扮する「伶人（れいじん）」が奏でる雅楽の音が響き渡る厳かな雰囲気の中、孔子像と顔子（がんし）、曾子（そうし）、子思子（しし）、孟子（もうし）の「四配の像」に栗や甘酒など8種の品を供える祭典で、宝永5年

古き良き文化が新しいまちを創る

釈菜の舞

釈菜の舞は、市民が多久聖廟の祭典行事「釈菜」の文化的価値を高めるために、孔子の生誕地である中国曲阜市に二千年前から伝わる「祭礼楽舞」から取り入れた舞です。本場、曲阜市の小道具や衣装を身に着け、聖廟前の境内で舞を披露します。

（1708年）の創建以来、現在まで受け継がれています。

祭典の長にあたる「献官」の市長を筆頭に、市内各一貫校の校長らが供え物を運ぶ祭官を務め、釈菜や聖廟をうたった漢詩も献上されます。

会場は大勢の観光客で賑わい、市内の中高生による「釈菜の舞」をはじめ、保育園児による太鼓の演奏や「論語朗唱」、小学生による腰鼓や参列生徒の唱歌など、多くの市民・教育者などの力によって伝えられ、まさに多久市民に息づく文教の誇りといえます。